

■ 第35回 多摩川流域セミナー

多摩川の川づくり総点検！ 第二弾！！ ～水流のふ・し・ぎ 日野の湧水に学ぶ～

主催：多摩川流域懇談会

平成13年3月に「多摩川水系河川整備計画」が策定されて、今年で10年目を迎えます。今年度の多摩川流域セミナーは、多摩川のこの10年を振り返ります。

今年度のセミナーは、第一弾は治水、第二弾は水流、第三弾は環境をテーマにしています。

今回の第二弾は、多摩川の身近な源流ともいえる湧水を見学します。日野市は、豊富な湧水群や用水網を持つ水のまちです。多摩川流域の水流のふしぎを、日野の湧水保全の取組から学びます。

● 日時

・・・平成22年10月2日（土）12時30分～17時10分（予定）

● プログラム

◇ 12時30分

JR中央線「日野駅」集合（日野駅からは現地までバスで移動します）

◇ 13時15分～13時45分

黒川清流公園湧水群の見学

◇ 14時00分～14時30分

図書館下湧水群の見学

◇ 15時00分～17時00分

ディスカッション（平山季重ふれあい館にて）

◇ 17時10分

終了予定時間

※ ディスカッション終了後、現地解散となります。（最寄り駅の京王線「平山城址公園駅」までは徒歩約2分です）

● 問い合わせ先

・・・多摩川流域懇談会事務局 NPO法人多摩川エコミュージアム

TEL.FAX.044-922-1025  <http://www.seseragikan.com>  npo@seseragikan.com



■ 第35回 多摩川流域セミナー 開催報告

「多摩川の川づくり総点検！ 第二弾！！」～水流のふ・し・ぎ 日野の湧水に学ぶ～

主催：多摩川流域懇談会

2010年（平成22年）10月2日（土）、多摩川の身近な源流ともいえる湧水にスポットをあてた第36回多摩川流域セミナーを開催しました。

今年の流域セミナーでは、今後のよりよい川づくりに向け治水・利水・環境などのスポット巡りながら、参加者のみなさまとの意見交換を行っていきます。

1. JR日野駅に集合

10月2日（土）午後12時30分、JR中央線日野駅に集合しました。曇りの予報でしたが当日は秋晴れの気持ちの良い天気で、集合場所には申込者の方ほぼ全員が集まりました。

ここから3台のマイクロバスに別れて、東京の名湧水57選にも選ばれている、黒川清流公園湧水群と図書館下湧水群の見学に向かいます。



2. 開会のあいさつ

1つめの見学場所である黒川清流公園にて開会となりました。TBネットの中村文明氏から「整備計画が策定されてから10年目の今年は、多摩川の川づくり総点検と題してセミナーを開催しており、第二弾として水流をテーマに湧水の豊富な日野で開催します。豊かに湧き出る湧水を見て歩き、身近な水と多摩川的水流についてご意見をいただく会にしたいです。」と開会のあいさつがありました。

本日のセミナー内容として、黒川清流公園湧水群と図書館下湧水群の二箇所を見学したあと、参加者のみなさまとディスカッションを行いたいという説明がありました。また、バスの中で日野市の湧水などについて説明して下さる日野市環境市民会議水分科会の小室氏、酒井氏、彦谷氏の紹介がありました。



黒川清流公園に到着



中村文明氏（TBネット）の開会あいさつ

3. 黒川清流公園湧水群（日野市）

早速、黒川清流公園湧水群について日野市緑と清流課の原課長から説明がありました。

黒川清流公園は、東京都から緑地保全地域として指定され支援を受け、昭和50年ころから斜面を含め全体を保全する動きが始まりました。

昭和40年ころから、黒川清流公園近辺はベットタウンとして発展してきましたが、駅が近いにも関わらず

これほどの自然が残されていること、さらに石で固めた水路など自然と調和して作られた公園ということで、市内また市外から多くの人を訪れているということでした。



黒川清流公園にて



公園内の湧水箇所

また、参加者の方々から何点か質問がありました。

- (Q) 黒川清流公園は水源あつての流れなのか？
- (A) 大地に降った雨が浅川の伏流水かは不明。
- (Q) 黒川清流公園についての反省点とは？
- (A) 湧水利用のために構造物で作りすぎたので、コンクリート打ちを木作や板作に変えるなど生態系に配慮してさらに自然に近づけたい。

次は、バスに乗って図書館下湧水群まで移動します。

4. バスの車中での説明

バスでの移動中にも、日野市環境市民会議の水分科会の方々から日野市の用水路と湧水の取り組みについて説明がありました。

日野市は、全長126kmの用水路が存在し、現在、宅地化による田んぼの減少や区画整理によって用水路が減少しています。そのため、用水路を保全するためにこれまで調査を行ってきました。これからは、用水路を環境の面からどのように残していくかが課題であり、用水路から湧水に目を向け、雨水を徐々に流していき水の有効利用を目指したいということでした。これから東光寺町付近で降雨と湧水の関係について調査をしようとしているそうです。

湧水の水量については、平均して黒川清流公園では35L/s、図書館下湧水では15L/sとなり、2月に水量が最小になり11月に最大になるとのことでした。



バスの中の様子



車中での説明

5. 図書館下湧水群(日野市中央図書館下)

2つめの見学場所、図書館下湧水群について日野市の原課長から説明がありました。図書館下湧水群は、崖下でそれほど高低差はないが水量が多く、また平成15年に東京都の湧水57選の1つにも選ばれました。その他、日野市内は3箇所が選ばれています。

また、図書館下湧水群は、川沿いを丸太と土留めで整備されており、豊田用水が流れ込んでいます。



原課長からの説明



図書館下湧水群見学のようす

ここでは、参加者の方から次の質問がありました。

(Q) 図書館下湧水群に生き物はいるのか？

(A) サワガニやトビケラなどの水生昆虫がいる。

6. 意見交換会場(平山季重ふれあい館)に到着

図書館下湧水群見学の後、バスに乗って意見交換会場となる平山季重ふれあい館に向かいました。移動する車内ではあらかじめ参加者のみなさんに意見交換までに質問・意見・提案カードに記入をお願いし、約15名の方にご協力いただきました。以下に、その一部を紹介します。

- 都心からほど遠くない住宅地と隣合せで自然のあれほど透き通った水流、池の姿をみることができ大変驚いた。逆に違和感さえあった。
- とても楽しかったです。今まで源流をゆっくりと歩いたことがなかったので面白かったです。水がとてもきれいで、良い所だけを見せて頂いたのかなと思いましたが、子供がとてもよろこんでいたのもっと時間があつたら逆に良かったのにも思いました。子供は水の中に入ってザリガニを捕まえたかったそうです。
- 湧水池、水路等できる限り自然に近い形で残せることが未来へ残す財産となると思う。区画整理も必要なことかと思われるが、地域の人々や自然環境を守ろうとする人々、そして行政と一体となった取り組みをさらに進めて欲しい。宅地化した地域でも、もともとあった水路をできるだけ目に見える形で残すにはどうすればよいのか、どんどん暗渠化していく現実に対応するにはどうしたらよいのか、沢山の課題

が今後も残ると思う。

- 雨水浸透マスの効果についての試算が示されたが、興味深いものです。実証できれば浸透マスの設置費用に対する効果がわかり、重要なこと。効果の実証を期待します。

7. ディスカッション(前半)

平山季重ふれあい館において行われたディスカッションでは、まず前半では現地見学の感想や質問について発表を行った後、話題提供として行政における取り組みを2つ紹介しました。

現地見学の感想

意見カードのご意見をもとに、現地見学の感想や質問について発表していただきました。

意見カードには、湧水に関するご意見やご質問が多数ありました。

- ・なぜ湧水が湧き出てくるのか？
- ・立川の湧水は枯れていてにろうが、日野の湧水はきれいでおいもなく、ぜひ近くに住みたいと思った。
- ・宅地化によって流れはどうなるのか？

これらの質問を受けて、案内して下さった酒井氏からは「わたしたちも湧水があるのはよいと思っている。日野市には日野台地の崖地からの湧水が多数ある。台地は工場や住宅地が建ち並んでいるが湧水量が多く、雨水も含めて水流解明を行いたい。」ということでした。



話題提供：日野市の湧水保全のとりくみ

次に、原課長(日野市緑と清流課)から日野市の湧水保全のとりくみについて説明がありました。そこで、日野市の特徴(面積、人口、地理的特徴)が説明され日野市の約15%が水域であるということ、また、昭和51年の清流条例から始まった日野市の清流への取り組みの歴史、さらに東京都の湧水の紹介、雨水浸透マスの普及状況について説明がありました。

また、日野市環境市民会議の酒井氏から市民活動について説明があり、これまでの活動で用水路マップの作成を行ったということ、これからは、用水路を残す目的を設定することが必要であるということ、学校や工場等に貯留槽を設置して水をゆっくり流すことが必要であるという提案がありました。



発表中の原課長



酒井氏による市民活動の発表

次に京浜河川事務所調査課の坪谷課長より、水流解明実態プロジェクトのとりくみについて説明を行いました。浅川流域の湧水量や河川水量の経年変化、日野市の市街地、雨水浸透施設の経年変化とその効果、これまでの水流実態解明プロジェクトで判明したこととこれからの目標について説明しました。



8. ディスカッション(後半)

前半の日野市の湧水保全のとりくみ、水流実態解明プロジェクトのとりくみの説明と、意見カードや会場からのご意見をもとに、ディスカッションを進めていきました。

浅川の流水

ご意見の1つに、「浅川の水は下水処理水が5割以上入っている。浅川に川の水が流れなくなるのではと危機感を感じている。解決策はないのか。」というものがあり、このご意見に対して意見交換を行いました。

都としては、同様の問題は浅川以外でも起きており、問題意識を持っている。今後解決策を検討して取り組んでいきたいという話でした。その他の参加者の方からは、「川の水が欲しいからといって、川に処理水を貰うのはおかしいと考える。雨が降った水が大地に染みこみ、浅川など川へながれてくるような、涵養を考えた取り組みを、10年20年かかっても行っていくべきと考える。」というご意見がありました。



日野の湧水について

湧水に関しては、湧水量の増減の主な原因や、湧水箇所と地形、地質の関係、湧水の水温等について質問がありました。日野市の湧水がどこから来ているのかという説については、コーディネーターの神谷氏から説明がありました。湧水の起源については、浅川の伏流水であるという説と、雨水が湧水となって湧き出ているという2つの説があり、専門家の間でも議論が進められているところだそうです。日野市の湧水保全のとりくみの中で、小倉先生もお話されていましたが、降水量と湧水量の関係をもみても、必ずしも湧水量は降水量だけでは説明できず、説明出来ない部分が浅川の伏流水だということもわかっていない状況にあるそうです。

また、近年の気候変動の影響により、集中豪雨が頻繁に発生して、日野台地の上でも冠水する場合があります。これに対して、配水管を整備して対策を行っているが、水流について考えるとこれも違うのではないかというご意見がありました。これに対しても、コーディネーターの神谷氏から建築学会での雨水基準や、東京都の方から平成18年に作られた「豪雨対策基本方針」、世田谷ダムが紹介されました。これらの取り組みは、降った雨を敷地の外に早く出すのではなく、雨水浸透ますなどを設置して地面に浸透させることや、貯留施設を設置して実際の降雨と時間差を設けて水を流し、川への負担を軽減させるというものでした。

参加者からは、各戸に雨水貯留施設を設置して、雨水を日々の生活に利用するという、沿川での雨水循環システムの提案もありました。

日野市の市民活動されている方々は、雨量と湧水量の関係を明らかにするためには、継続的に調査を行うことが大切だと考えており、雨量や湧水量の計測機器を設置してデータを蓄積していきたい。これらの調査は、市などと協力して行えればと話されていました。

京浜河川事務所からは「水流実態解明プロジェクトでは、各自治体からのデータを頂いて解析を行っている。日野市のように継続したデータは、とても貴重であり、役に立っている。多摩川流域の水流調査では、市民の方々と一緒に湧水量などの調査を行っていききたい。みなさまのご協力をお願いします。」と、プロジェクトへの協力をお願いしました。



まとめ

コーディネーターの神谷氏から、「韓国やドイツでは雨水の取り扱いについて法で定められ、貯留施設の整備や各貯留施設の総合的な運用が行われている。今後、日本においても水流実態解明プロジェクトのような活動をPRする必要がある。日野市でも実際に東光寺湧水での調査が進んでいけばと思う。」とコメントがありました。

市民を代表してTBネット代表の中村文明氏からは、「浅川を考えるなら八王子と一体となった取り組みが必要である。多摩川の源流である小菅村や丹波山村の森林保全と水流の関係も考えていきたいと思う。また、今回のセミナーは、日野の豊かな湧水が沢山の参加者を呼び寄せたと感じる。日野市には16年前から水路清流課があり、先進的な自治体だと思っている。先進的な湧水保全の取り組みを、さらに宣伝して、日野の湧水を多摩川の宝として保全して頂ければと思う。」と、セミナーのまとめがありました。

最後に京浜河川事務所元永所長から、「今日は1つの源流を見てきたんだと思う。下水処理水が浅川の源流になっていることをもう一歩進んで考えると、処理場に流れ込んでいる水は何か、それは水道水や、井戸水、雨水などである。このように、下水処理場に入ってくる水を考えれば解決の糸口になると思う。来年3月には、整備計画策定10周年である。本当にいい川になるかは20年後にわかるだろう。この10年間に何をしてきたのか、残りの20年間に何を行っていくべきなのか事務所としてもしっかりと頑張っていかなければいけないと思う。鶴見川では、30年間かけてから総合治水を取り組み、約3300基の遊水池や調節池を管理してきた。この一旦水を貯めてゆっくり流す遊水池は、水循環の中にも生きていく可能性があると感じた。流水や流域の湧き水を保全していければ、多摩川に臭いのしない、いい川の流れを取り戻すことができるのではないかと考える。我々もこの水流実態解明プロジェクトをわかりやすく、市民運動につなげていくようなかたちで10年を振り返れたらと思う。」とあいさつがあり、第35回多摩川流域セミナーは幕を閉じました。



今日のセミナーを振り返る中村氏



元永所長による閉会のあいさつ